



# 星空紀行

～銀河鉄道の夜汽車に乗って～

2013年07月18日

## 教師時代の作品群 (7)～(11)

(7)

星が登場する作品のひとつに「水仙月の四日」がある。賢治の生前に刊行された「注文の多い料理店」に収められた作品のひとつで、やはり賢治が教師として生徒と接しながら、活発に執筆をはじめた頃の作である。

水仙月の四日というのが、いつのことなのかは議論があるが、一般には春の訪れを予感させる季節だろう。このあたりで水仙が咲くのは4月ごろだが、さすがに東北では春まだ浅く、しばしば吹雪もある事を考えれば、自然かもしれない。

この物語のストーリーは比較的単純である。手下の雪狼を従えた雪童子が仕事で雪を降らせようとしているところに、家路へと急ぐ赤い毛布をかぶった子供が通りかかる。その冒頭で、賢治らしい星の表現が現れる。

「カシオピア、  
もう水仙が咲き出すぞ  
おまへのガラスの水車  
きつきとまはせ。」

雪童子はまつ青なそらを見あげて見えない星に叫びました。

(中略)

「アンドロメダ、  
あぜみの花がもう咲くぞ、  
おまへのラムプのアルコール、  
しゅうしゅと噴かせ。」  
雪童子は、風のやうに象の形の丘にのぼりました。

言うまでもなく、秋の星座であるカシオペヤ座とアンドロメダ座である。青空に隠れて、春には見えない星座を登場させるのがひとつのポイントだろう。ガラスの水車というのが何かわからないのだが、一説には天球をガラスに見立てて、カシオペヤ座が北極星のまわりを日周運動によって回転する様子を水車に見立てたともいわれている。特に、アンドロメダの「ラムプ」は、アンドロメダ座にある大銀河M31のことにちがいない。夜空の暗いところなら、アンドロメダ大銀河は肉眼でぼやっと見ることができるが、輪郭がはっきりしない様子は確かにランプの炎のようだ。

さて、雪童子は、その子供に宿り木の枝を投げて、からかって遊んでいるうちに、他の雪童子を連れて、親玉である「雪婆んご」がやってきて、天候を急変させる。その命令に従い、雪童子も雪を降らせながらも、人間の子供を気遣う。投げた宿り木の枝を持っていてくれたことに喜んで、雪婆んごの目を盗んで、動けなくなった子供に毛布代わりにわざと雪を積もらせていく。そして、雪婆が東へ去ると、天候も回復する。その直後の表現も注目したい。

野はらも丘もほつとしたやうになつて、雪は青じろくひかりました。空もいつかすつかり霽(は)れて、桔梗いろの天球には、いちめんの星座がまたたきました。

「桔梗いろの天球」というのは格別の表現と思う。そして、残された雪童子たちが会話を交わすシーン。

「さつきこどもがひとり死んだな。」  
「大丈夫だよ。眠つてるんだ。あしたあすこへぼくしるしをつけておくから。」  
「ああ、もう帰らう。夜明けまでに向ふへ行かなくちや。」  
「まあいゝだらう。ぼくね、どうしてもわからない。あいつはカシオペーアの三つ星だらう。みんな青い火なんだらう。それなのに、どうして火がよく燃えれば、雪をよこすんだらう。」  
「それはね、電気菓子とおなじだよ。そら、ぐるぐるぐるまはつてゐるだらう。ザラメがみんな、ふわふわのお菓子になるねえ、だから火がよく燃えればいゝんだよ。」  
「ああ。」  
「ぢや、さよなら。」  
「さよなら。」

この部分の星の表現はかなり不思議である。カシオペヤは五つ星で、三つ星ではないからだ。もしかすると五つの星のうち、真ん中の三つを回転するものと見立てて、冒頭の水車になっているのだろうか。それはともかく、火が雪になるという発想が、綿菓子（電気菓子）をつくることとのアナロジーで語られているのはおもしろい。

さて、物語の最後の舞台は、朝日が昇った雪景色である。昨夜、埋まった子供のところへ行き、その子供を起こすのだ。

「さあ、ここらの雪をちらしておくれ。」  
雪狼どもは、たちまち後足で、そこらの雪をけたてました。風がそれをけむりのやうに飛ばしました。  
かんじきをはき毛皮を着た人が、村の方から急いでやつてきました。

「もういゝよ。」 雪童子は子供の赤い毛布のはじが、ちらつと雪から出たのをみて叫びました。

「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし。」 雪わらすはうしろの丘にかけあがつて一本の雪けむりをたてながら叫びました。子どもはちらつとうごいたやうでした。そして毛皮の人は一生けん命走ってきました。

こうしてハッピーエンドを示唆したまま、いささか唐突に物語は終わっている。この物語は、天でも宇宙ではなく、気象現象を擬人化し、地との関係を紡いだ物語ともいえる。意思を持たない吹雪や風といった自然現象を擬人化して意思を持たせるのは、賢治のみならず、童話の基本とも言えるが、賢治がこの物語を作った背景には少し深い訳もありそうだ。

もともと、この時代には、猛吹雪に埋まって命を落とす人も少なくなかった。現代でさえまだニュースになることもあるほどだが、当時は交通手段も限られ、天気予報もそれほど確立していなかった。筆者の故郷である会津地方は山国であり、雪も深く、特にこうした例は後を絶たない。奥会津には駒止峠という峠があるのだが、明治14年に職務でここを越えようとした巡査や、大正12年には郵便局員が殉職しており、毎年慰霊祭も行われている。映画や小説になった八甲田雪中行軍遭難事件は、明治35年のことだ。賢治も、そういった悲惨な死を聞いた可能性は大きいだろう。しかし、皆の幸せを追求する賢治にとっては、せめて物語の中だけでも、そして子供だけでも救ってあげたいと思ったのかも知れない。

(8)

星が登場する賢治の代表的作品のひとつが「よだかの星」である。この物語は短い上に賢治独特の夢の世界からさらなる高次元の世界へ上ることもなく、ストーリーとしても単純である。弱い者への、あるいは外見への差別という教訓的な内容を含んでいるので、賢治の童話としての登場頻度は高く、かつては国語の教科書などにも採用されたこともあるので、お読みになった方も多だろう。

よだかは、実にみにくい鳥です。

というフレーズで始まる物語は、すぐに外見の醜悪さから他の鳥たちに嫌われている様子へとつながり、さらに鷹という名前が着いていることを許せないという本物の鷹から、名前を「市蔵」にせよ、と改名を強要される。こうして無理強いされたよだかは、絶望しながら、夜に飛び回る虫を食べている自分にも嫌気がさして、ついに遠くへ行って死ぬことを決意する。

また一足の甲虫が、夜だかののどに、はいりました。そしてまるでよだかの咽喉をひっかいてばたばたしました。よだかはそれを無理にのみこんでしまいましたが、その時、急に胸がどきっとして、夜だかは大声をあげて泣き出しました。泣きながらぐるぐるぐるぐる空をめぐるのです。

(ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向うに行ってしまう。)

同じような表現は、「銀河鉄道之夜」にも現れるが、この表現には、生きるために命をいただくという行為、そしてその連鎖の中にある自分の存在に耐えられずに自己犠牲的な考えを持つ賢治独特の

感情がにじみ出ている。

こうして、まず向かった先は太陽であった。太陽へ向かって飛べば焼け死ぬると思ったのである。しかし、そうはいかなかった。太陽はよだかに、

「お前はよだかだな。なるほど、ずいぶんつらかるう。今度そらを飛んで、星にそうたのんでごらん。お前はひるの鳥ではないのだからな。」

と、突き放す。そのために、よだかは夜に次々と星を訪ねる。最初に訪ねたのは西に沈みかけたオリオン座である。しかし、オリオン座は何も答えない。今度は、少し東のおおいぬ座のシリウスに向かう。しかし、シリウスは冷たく答える。

大犬は青や紫（むらさき）や黄やうつくしくせわしくまたたきながら云いました。「馬鹿を云うな。おまえなんか一体どんなものだい。たかが鳥じゃないか。おまえのはねでここまで来るには、億年兆年億兆年だ。」

ここでシリウスの輝きを「青や紫（むらさき）や黄やうつくしくせわしくまたたきながら」と表現していることに注目して欲しい。明るい星が低空で激しく瞬くとき、しばしば色が瞬間的に見えることがある。天体望遠鏡で拡大すると、まさに七色の輝きが消えたり見えたりして美しい。賢治も実際、そんなシリウスの瞬きを見ていたに違いない。

さて、冷たくされたよだかは、さらに北の空を目指す。北の空には北斗七星（作中では大熊星）が上っている。しかし、答えは同じだった。

大熊星はしずかに云いました。「余計なことを考えるものではない。少し頭をひやして来なさい。そう云うときは、氷山の浮（う）いている海の中へ飛び込（こ）むか、近くに海がなかったら、氷をうかべたコップの水の中へ飛び込むのが一等だ。」

そして再度、東から上ってきた夏の星座のわし座のアルタイルに助けを乞う。しかし、地獄の沙汰も金次第というような答えが返ってくる。

鷺は大風（おおふう）に云いました。「いいや、とてもとて、話にも何にもならん。星になるには、それ相応の身分でなくちゃいかん。又よほど金もいるのだ。」

こうして、最後によだかはまっすぐに空へのぼって行き、自ら光輝く星となるのである。

そして自分のからだがいま燐（りん）の火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているのを見ました。

すぐとなりは、カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになっていました。そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。

今でもまだ燃えています。

よだかの星が輝いているカシオピア座は、正式にはカシオペヤ座である。その辺りには明るい星はないので、空想上の星といわれているが、16世紀に、この星座に現れた超新星をイメージしているのではないか、という説もある。

よだかが星座を巡っていく様子は、一晩中飛び続けるとすれば、実際の夜空とかなり一致している。4月の中旬頃だとすれば、22時頃に西に冬の星座であるオリオン座やおおいぬ座が沈み、北斗七星が天高く上がっており、また深夜を過ぎればわし座が上ってくる。明け方近くにはカシオペヤ座が北東に姿を見せる。

まっすぐに空へ上っていくという場所ではないが、それほど正確さも童話にはいらないだろう。

いずれにしても、この作品の結末は実に悲しい。どこにも救いが無い。この作品は賢治が東京から帰った年の前後に書かれたとされている。誰に助けを求めても救われない状況は、夢破れて故郷に帰ったものの、自分の居場所が見つからず、教師になっても、しばらくは悶々としていた賢治の心中そのものであったのかもしれない。

(9)

教師時代の賢治は、生徒とのふれあいの中から、次第に生きがいを見いだしていくと同時に、様々な作品を生み出していったのだが、その反面で、ある事件が彼の精神状態に影を落とした。それは、妹トシの死である。

賢治は長男で、兄弟としては弟と3人の妹とがおり、兄としてずいぶんと面倒を見ていたようだ。賢治自身が自作の童話を妹たちに読み聞かせていたことも知られている。特に長女でもある妹トシは2歳違いで、学業も優秀で、花巻高等女学校では主席で卒業し、総代として答辞を述べたほどである。東京の日本女子大学に入学したが、途中でスペイン風邪から肺炎を起こし、さらには結核にかかっていたことがわかる。その後、帰郷・静養を余儀なくされていたが、もともと優秀な成績だったこともあり、見込み点で卒業が認められた。1920年秋には、母校である花巻高等女学校の教諭心得となって、英語と家事を教えはじめた。しかし、翌年9月に喀血し、退職を余儀なくされる。病状が悪化したことが、(友人・保阪嘉内との意見の相違による)失意の中で、さまよいはじめていた賢治自身を帰郷させるきっかけになったわけである。

みぞれが降り始めた1922年11月27日、トシは賢治にみぞれをとってきてくれ、と頼んだ。それを食べて、さっぱりしたと喜んだという。その夜にトシは亡くなった。賢治は押し入れに頭を突っ込んでおいおいと泣いたという話が伝わっている。ひとしきり泣いた後、賢治は自分の膝にトシの頭を乗せ、その乱れた黒髪を火箸で梳いてやったとされている。

それにしても、帰郷して、不本意ながらも教師として歩み始めた賢治にとって、わずか一年後の妹トシの死は、賢治に計り知れないショックを与えた。そして、その悲しみを言葉に残し、「永訣の朝」や「無声慟哭」に結実させている。おそらく、死を受け入れるために、ほとぼしる感情を言葉にでもしない限り、平常心を保てなかったのではないだろうか。「永訣の朝」は、こんなフレーズではじまる。

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)

(あめゆじゆとてちてけんじや) というのは、みぞれを少しとってきてください、という意味の方言である。賢治にしては直截すぎる言葉が、なおさら悲しみにくれる賢治の心を表わしているといえる。そして天からの贈り物として、

銀河や太陽 気圏などよばれたせかいの  
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……  
……ふたきれのみかげせきざいに  
みぞれはさびしくたまつてゐる

と、みぞれを天よりももっと上の世界からの贈り物として捉え、表現している。「無声慟哭」と併せて読むと、最愛の妹を亡くした賢治の悲しみがストレートに伝わってくる。そして、この後、賢治は北への旅へと向かうことになる。

(10)

最愛の妹トシの死で生み出された作品「永訣の朝」そして「無声慟哭」から感じられる賢治の悲しみはとても深いものがある。それは、その後も尾を引き、賢治の生き方にも影響を与えていくことになる。教師として、なかば夢中で生徒と向き合っているときには、ある意味で忘れられていたのかもしれない。悲しみが深いと、落ち着いて内省をするような時間があればあるほど、かえって大きくなることもある。トシの死が、再び賢治の心を大きく占める時間は、トシの死から半年以上も過ぎた頃、1923年(大正12年)7月にやってきた。賢治が、自ら青森から北海道を経て、樺太まで一人で旅をしたときのことだった。旅の目的は、花巻農学校の教師として、生徒の就職を依頼することだった。樺太の王子製紙には賢治の知り合いがいたのだという。しかし、それはあくまで一つの目的だったのかもしれない。

誰でもそうだと思うが、日常生活を過ごしている時に比べると、非日常空間に身を置く、旅という行為は、それがパック旅行のように仕立てられたものであっても、しばしば自分自身を振り返ったり、自分の生活を振り返ったりするきっかけになる。しかも、飛行機でひとつ飛びできるような時代ではなかった。汽車と船とを乗り継いで、何日もかけて樺太まで行くという、本当に時間がかかる旅路である。帰郷するのは半月後の8月12日であった。時間があればあるほど、過ぎゆく風景の中に、今は亡き妹を思い、自分と別な道を進むことを選んだ友を思うことになる。逆に言えば、妹トシの死を思い、その魂の行方を追う旅だったといっても過言ではない。それは旅の最中、生み出されたたくさんの詩に表わされている。

そのひとつ、「青森挽歌」の出だしは、まるで銀河鉄道の夜の構想に繋がったのではないかとさえ思われるものだ。

こんなやみよののはらのなかをゆくときは  
客車のまどはみんな水族館の窓になる  
(乾いたでんしんばしらの列が  
せはしく遷つてゐるらしい  
きしやは銀河系の玲瓏(れいらう)レンズ  
巨きな水素のりんごのなかをかけてゐる)

そして、長大な詩の中核を成すのは、妹への思い、それを負い続ける自分への思いである。

海がこんなに青いのに  
わたくしがまだとし子のことを考へてゐると  
なぜおまへはそんなにひとりばかりの妹を

悼んでゐるかと思ひとびとの表情が言ひ  
またわたくしのなかでいふ

(オホーツク挽歌より)

同じ旅行中に書かれた「噴火湾(ノクターン)」の一節にも強く賢治の気持ちは表れている。

(前略)

七月末のそのころに  
思ひ余つたやうにとし子と言つた  
《おらあど死んでもいゝはんて  
あの林の中さ行くだい  
うごいで熱は高くなつても  
あの林の中でだらほんとに死んでもいいはんて》」

この旅行中に、賢治は「青森挽歌」だけでなく、「オホーツク挽歌」「樺太鉄道」「鈴谷平原」「津軽海峡」「駒ヶ岳」「旭川」そして「宗谷挽歌」といった膨大な鎮魂詩といつてもよい作品を残している。それらには風景の中に感じた魂を探す賢治の叫びが刻まれている。もちろん、妹トシの魂を探す思索の旅ではあったが、それはやがて見事なまでに自分自身への問いに変化していく。すなわち自分自身がこのままでよいのか、という疑問を生んでいくのである。

(11)

妹トシの死から半年。そのショックから立ち直るためとも解釈される樺太への旅。表向きは教師としての公務出張の形をとってはいたが、その旅の途中で、賢治は膨大な鎮魂詩群を残した。そして、同時にこの旅は賢治自身への問いかけに変化し、やがては名作「銀河鉄道の夜」の着想を得ていくきっかけになったといつてもよい。

この旅の翌年、前述の鎮魂の詩を含めて、賢治が残した散文詩群は心象スケッチ「春と修羅」に集大成される。以前にも、その中からいくつかを紹介しているのだが、妹の死から一定の時を経たせいか、ストレートな鎮魂の思ひは影に隠れ、日常生活で触れる様々な自然や現象を文学的に深みのある言葉で表現している詩も現われている。特に注目すべきは、その年末に書かれたと思われる「冬と銀河ステーション」であろう。

そらにはちりのやうに小鳥がとび  
かげらふや青いギリシヤ文字は  
せはしく野はらの雪に燃えます  
パツセン大街道のひのきからは  
凍ったしづくが燦々さんさんと降り  
銀河ステーションの遠方シグナルも  
けさはまっ赤かに澱んでゐます」

「シグナルとシグナレス」にも登場している「ギリシア文字」は、天文ファンならまず覚えるであろう、恒星に付けられた「バイエル符号」のことである。 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\delta$ ・・・というギリシア文字を用いて、星座毎に、その中の明るい恒星の順につける天文学独特のものだ。

この冬の銀河軽便鉄道は  
幾重のあえかな氷をくぐり

(中略)

パツセン大街道のひのきから  
しづくは燃えていちめん而降り  
はねあがる青い枝や  
紅玉やトパーズまたいろいろのスペクトルや  
もうまるで市場のやうな盛んな取引です

銀河軽便鉄道、そして紅玉やトパーズといったフレーズも、まさに「銀河鉄道の夜」に繋がる言葉、発想であることは明らかである。

この心象スケッチ「春と修羅」は自費出版であったが、読売新聞紙上で、当時、翻訳家などとして活躍した辻潤が、その連載中で賞賛した他、草野心平の目にもとまった。しかし、こうした評価も当時はごく一部だけで、その後、賢治の文才が認められ、原稿依頼が殺到するようなことはなかった。鎮魂の詩を出発点として、自らの内面を見つめ、自身に問いかけつつ、「銀河鉄道の夜」への構想を膨らませる賢治の精神の旅の片鱗が見え隠れしているといえるだろう。